

**令和元（2019）年度 第1回「やまの健康」推進懇話会
議事録<要約版>**

- 日 時：令和元（2019）年8月5日（月） 9：30～11：30
○場 所：大津合同庁舎 7-A会議室（滋賀県大津市松本1-2-1）
○参加者：<委員>藤山座長、清水委員、加藤委員、鵜飼委員、藤岡委員、山口委員
 <滋賀県>三日月知事、石河部長、高木次長、廣瀬課長、櫻本主幹、田中主査

（1）開会あいさつ<滋賀県琵琶湖環境部長 石河 康久>

（2）懇話会委員 紹介

（3）県の森林の現状および（仮）「やまの健康」構想の骨格について<滋賀県琵琶湖環境部森林政策課>

（資料『「やまの健康」推進懇話会（本編）』参照）

- ・本事業では、森林、林業、農山村を一体的に捉えて琵琶湖を取り巻く森林や農地を適切に管理し、そのうえで、農山村の価値や魅力、地域資源を活かしたモノやサービスによって、小さくても経済循環や、都市部を含めた県民との全体の関わりをつくることで、農山村が活性化していく姿を実現していくことを見据えている。この構想は、一般的な行政計画ではなく、農山村の将来ビジョンを県民の皆さんと共有し、「やまの健康」のムーブメントへの参加と拡大を促していこうと考えている。
- ・構成の骨組みとしては、「地域を知ろう」「やま」について考えよう」「みんなで、まずやってみよう」「みんなの活動の仲間を増やそう」「将来の「やま」の姿を描こう」ということから、「豊かさ」「幸せ」「にぎわい」「持続可能」といったことを実現していこうという流れを考えている。この5つ骨組みに、それぞれ2つずつ、計10個の項目を具体的な方向性として示している。加えて、「森林からはじめる地域を支える基盤整備＝農山村の下支え」として、県や市町の役割として、人材育成とネットワーク形成を支援していきたいと考えている。
- ・滋賀県では全庁をあげてSDGsに取り組んでおり、本事業でもSDGsとの関係を描いていきたい。
- ・「「やまの健康」に向けた現在の取組状況と課題について」の図表では、左軸に「やまの健康」構想素案項目、中軸に素案の各項目に対応していると考えられる既存の取組あるいは、今後取組の必要があるもの、右軸にこの取組を進めていくうえでの県の取組における課題と考えていることを記載している。

（4）滋賀県における農山村地域の魅力について<加藤 賢治 氏（成安造形大学附属近江学研究所 副所長）>

滋賀県の山、里、川の地理的特徴や歴史・文化などの切り口から、滋賀県における農山村地域の魅力や、山と関わる暮らしのあり方などについて話題提供。

（5）「やまの健康」の取り組みへの思い<三日月 大造 知事>

- ・滋賀県では「健康しが」として、「人の健康」、人と人との支え合いの「社会の健康」、その土台となる「自然の健康」を保ち高める取組を進めている。私たちは琵琶湖をお預かりし、県土の約半分を占める森林など豊かな自然環境をより良い状態で次の世代に引き継いでいかなければならないと考えている。それと同時にそのうえに暮らす私たちの豊かさについて常々考えながら県政をさせていただいている。
- ・“今”だけではなく持続可能な形で、モノだけではなく全ての人が心で実感できる豊かさを皆でつくっていく、私たち人だけではなく、生きとし生けるもの全てに共通するような豊かさというものをつくっていくという「新しい豊かさ」を呼びかけている。その文脈のひとつが「健康しが」であり、その取組のひとつがSDGsに対する取組である。こういった取組を具現化すべく、知事になってからこれまで10回、主に山間地を中心に短期居住を行い、山間部の方々と様々な語り、交わりを持たせていただいている。
- ・「やまの健康」推進懇話会でご議論いただく際に、私が大事であると考えていることのひとつは、山の恵みに対する感謝である。山の恵みというもの永遠ではない。山に手が入らないと荒れる一方であるが、人が減ってくる現状では、私たちが切り拓かせていただいたところを自然にかえしていくことも必要なのではないかと。二つ目は、山の民の営みに対する問題である。私たちはどうしても琵琶湖をクローズアップして注目・発信しがちであるが、その琵琶湖の源流である山をもう一度しっかりと守っていきたい。その営みや日々の暮らしなど、もっと現実に寄り添った諸施策を展開していくべきであると考えている。三点目は、山の神に対する恐れである。ぜひこういったところにもしっかりと目を向けた、心を向けた議論をしていただければと思っている。最後は、100年、200年単位の議論をしなければならないのではないかと考えている。時間軸を長く持ち、歴史も長く遡った、そういった議論を令和の時代からその次の時代に、また21世紀から22世紀に向けて、そのためにいま私たちは何を皆さんと一緒に考え、一定の方向性を出していければと思っている。

(6) 持続可能な滋賀県の農山村を目指して～循環型社会への先着<藤山 浩 座長> ((一社) 持続可能な地域社会総合研究所 所長)

パワーポイント資料を用いて、地方の人口増減や地域診断に基づくコミュニティ運営などの切り口から、循環型社会のしくみづくりなどについて話題提供。

(7) 意見交換<進行：藤山 座長>

○「(仮)「やまの健康」構想の骨格」について、「県民が動き出すかどうか」にポイントを置き、構想の骨格そのものに対する更なる視点および11個示されている方向性に対するご提案などを自由に議論いただく。

委員：地域から出ていくエネルギーをどのように地域内に留めるかということに関心がある。骨格のなかで何らかの形でエネルギーについて示すことができないか。中山間部では木材は豊富にあるので、将来的なエネルギーに対する不安は少なくなる。域内で流通させれば経済的な負担も少ないし、シェアハウス、カーシェアリングのような方法も考えられるので、中山間部はポテンシャルが非常に高いということを実際に感じられるような機会や場所をつくれればおもしろいと思う。また、ものをつくるという人間の根本的な楽しみが発揮されると、ムーブメントが大きくなるのではないかと。事例を提示して、そこにいけばいろんなことができるという場所をあちこちにつくれば、可能性が広がるのではないかと。

委員：県民の大半は都市部の住民であるので、都市部の住民がどういった課題を持っているのかを見極め、それを解決するために山を利活用するという発想を持つ必要があるのではないかと。また、先ほどの藤山座長のお話から、鍵になる対象として30代女性が挙がっていたが、具体的な対象の現状や抱える課題を分析することが大事なのではないかと。既存のサービスを無理に使うというよりは、山にある様々な資源を使って、課題を解決するようなサポートができればよい。

委員：日本人は非常に長い森林との関わりを持つ歴史を持っている特徴がある。東近江が木地師発祥の地ということもあって調べてみると、木地師は全国区で助け合いのしくみをつくっており、そのベースに森林との関わりがあった。木地師を訪ねてその地へ行き、商売を起こして地域の方と一緒に地域を豊かにすることを実現したのが近江商人といわれる人たちではないかと考えられ、助け合いと経済が共存していた。私たちは地域で自立して暮らすということの豊かさも追求しなければならないが、外とのつながりをよりつくるといってをもっとダイナミックに考えていってもよいのではないかと。その交通路になっていたのが森であり、峠である。人が行き交うということは、情報が行き交うということであり、だから、そこに経済が乗ってくる。日本人はそのバランスをかなり長いあいだ上手にとっていたのではないかと想像している。こうした過去を正しく振り返りながら、近江の強みは何なのかについて構想に書いていただくと、楽しそうだなと思う人たちが山に来てくれるのではないかと。

委員：先ほども出ていた30代女子にターゲットを絞った施策を打つとよいのではないかと。県大生に集落に住んでもらう取組をしているが、その8割が20代女性である。こういったしくみをたくさんつくっていけば、山との距離が縮まるのではないかと。また、子どもが生まれたときに木のおもちゃを贈るといったような、若い母親たちに山からのギフトを贈る取組をするなど、山の利子を若い女性に届けて、それに恩を感じた人たちが、山に恩返しをするようなしくみができるのではないかと。感度の高い人たちだけではなく、まだ気づいていない層の人たちに対して、森林税なども活用しながら辛抱強く働きかけるといったことが必要ではないかと。対象をしばって、そこにどうPRするかということを実施として取り組むと、そこから、広がり、つながっていくと思う。

委員：江戸時代の暮らしは循環型であったと言える。それを改めて見なおしながら、ターゲットを絞って取り組んでいかないと、全体の話をしていても進みにくい。基礎調査をやりながら具体的な話をしていけばよいのではないかと。都会に住む人と山の環境との関係をつくりながら、山に住む人を徐々に育てていくようなことが理想なのではないかと。また、大量生産、大量消費ではなく、ものを最後まで大切に使い切って供養するという思想・哲学も取り入れていくことは大切ではないかと。

座長：2回目の懇話会に向けては、地域の実情を知るための診断的なデータを集めていってはどうか。また、現場で展開しているモデル事業の報告をいただき、そこで見えてきた課題などを共有して議論したい。提案としては、30代(アラサー代)女性と「やまの健康」とがどのように結びついていくのかといった関係図の仮案を事務局でも検討していただき、多様な分野の専門家が集まっている懇話会で議論するといった形で進めてはどうかと考えている。

(8) 「やまの健康」推進事業についての情報共有<(一社) コミュニケーションデザイン機構>

閉会

以上